

カレッジ情報誌のコラム「ボランティアの心」欄で20年12月号に食文5期辻郁子さん、21年2月号に福祉11期増金スミ子さんの寄稿文が掲載されましたので、紹介します。

「させて頂く」を心がけて

食文5期生 辻 郁子

退職して人生のゴールデンタイムを迎え、シルバーカレッジに入学したことを、よい選択だったとよく思います。食文化コースで食の基本を学び、未だに仲間とよいお付き合いをしています。

さて、「再び学んで他のために」……この建学の精神に沿って、自分に何ができるかと悩む間もなく、いくつかのボランティア活動に参加する機会がありました。

カレッジ時代からの人形劇では、沢山の子もたちと出会うことができました。保育所で「赤ずきんちゃん」の狼に泣かれたり、小さい子は年長さんが笑ったら、それを真似て遅れて笑ったりで、ほんとに心が和みました。

教育園のジャム作りでは、ベッドに寝て酸素吸入をしながらの子どもさんがいました。目も不自由でしたが、果物がジャムになっていくにつれて明らかに表情が変わり、人間の持つ感性に深い感動を覚えました。

このように、ボランティアを通して、私自身が心豊かになっていくようでした。そんな中で心がけていることは、自分が楽しく明るく活動すること、そして、何より「謙虚である」ことです。「してあげる」ではなく、「させて頂く」ですね。

有馬やフルーツフラワーパークのガイドもしています。二人で組んでやるのですが、ある日、行き先を尋ねられて二人同時に反対側を示し、大阪のお兄ちゃんに「どっちなんや！」と叱られたことがありました。恐縮して謝り、後でククッと笑ってしまいました。喜ばれたときは、私たちの気持ちもほっこりします。

「私たちって、ほんとに親切なガイドしてるよね。いつか新聞に載らないかな」なんて、相棒さんと冗談を言っています。あっ、これって「謙虚」じゃないですよ。

いつか、ご一緒に活動しましょう。

「ありがとう」の言葉と一緒に

福祉11期生 増金 スミ子

私がボランティア活動に目覚めたのは、30年前のこと。学生時代は、ソフトボールで活躍し、結婚後は家庭でホームランをと頑張っていたのですが、子供が小学校に入った頃から少し時間に余裕ができ、親としても子供達といっしょに、成長したいとPTA役員、婦人会、シルバーカレッジに学ぶようになりました。

そのうち、社会に少しでも役立つことに喜びを感じたのがきっかけとなって、意欲的にできる限りの場に参加しながら、活動を、徐々に広げていき、気がつくと、かれこれ30年になっていました。

ボランティア活動をするに際して、主人から贈られた言葉が「チャリティ・シュド ビギン アットホーム」(ボランティアは、先ずは、家庭から)ということで、時々「家のボランティアはどうなっているのかね?」と、言う声を聞き、ハツとして、反省する時期もありましたが、今は一番の理解者として、協力をして貰っています。

車椅子介助から始め、カーボランティア、学習支援手話通訳、友愛訪問の活動から阪神大震災後、少しでも明るくなって欲しいと願い、県下一円の施設等で、大道芸をして、喜んで頂きながら、また、3年前から自宅を開放して、月2回の割りで「ふれあい喫茶」を開き「仲良く、楽しく、心地良く過ごせる地域づくり」を理念に、地域の方々が住み慣れたところで、如何により幸せに生きることが出来るかを目指して、インフォームドコンセントを図りながら続けていますが、実は一番楽しんでいるのは、私かも知れません。

いろんな所で、人との出会いの中で気づかされ、励まされ、喜びも悲しみも様々な学びがある



ことに感謝し、これからも時間の許す限り、崖っ淵に花を咲かせながら「ありがとう」の言葉と一緒に、今後は若手の育成にも力を尽くして生きたいと考えています。